


# 九重火山の噴火史と噴出量の変化

九重火山は5万分の1宮原図幅地域とその東隣の久住図幅地域にまたがって分布する火山群であり、中心部には急峻な溶岩円頂丘群と小成層火山とが集合する、これらの間の層序は溶岩の噴出に伴って放出された降下火砕物や広域テフラとの被覆関係によって明らかにされる、そのようにして決めた九重火山の最近1.5万年間の噴出速度は雲仙火山を約1桁上回る。(詳しくは本文36-39頁参照)  
〈地質調査所 大飯地域地質センター 鎌田浩毅・地質部 星住英夫・環境地質部 川辺禎久〉



- 
1. 東側上空から見た九重火山の全景：噴煙の左の山稜は久住山と稲星山、噴煙のすぐ向こうが鬼生山、その右が三俣山、その手前の二股の山頂は草治岳(以上10,000-15,000年前に噴出)、平治岳の左の黒い山が大船山(3,000-5,000年前)で大きな火口が窪窪、更に手前の山は最も若い山体である約1,700年前の黒岳、遠方に見える山は熊本壹峰火山、その右の雲海上に顔を出すのが雲仙火山の曹賢岳。(1995年10月18日9時に撮影)
  2. 九重火山起源の降下火砕物と広域テフラ：松の台岩層なだらけ堆積物を覆う黒ボクの中に下から鬼界アカホヤ火山灰(緑色；約6,300年前)、A1火山灰(薄茶色；約5,000年前)、段原スコリア(A1と地表の中間；約4,000年前)が挟まれる、スケールは1m、(鬼生山の北約5kmのやまなみハウエイ沿いにて撮影)
  3. 南西側から見た九重火山の溶岩ドーム群：左から岩井川岳、扇ヶ岳、肥前ヶ城(以上4,000-5,000年前の黒雲母角閃岩デイサイト溶岩)、久住山、稲星山(以上角閃石安山岩溶岩)の順に並ぶ、(久住町白丹入口より撮影)